



日体大リポジトリ

編集後記（第三部 資料編）

著者	日本体育会百年史編纂委員会
雑誌名	学校法人日本体育会百年史
ページ	1943-1947
発行年	1991-10-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1444/00001104/

《編集後記》

昭和五十七年一月十三日、学校法人日本体育会理事会は「学校法人日本体育会・日本体育大学百年史編纂委員会規程」を採択し、編纂委員会をスタートさせた。この規程によれば、編纂委員会は「学校法人日本体育会・日本体育大学百年史」の編集にあたることを目的に、(一)百年史の企画立案、(二)百年史に関する資料の収集、(三)百年史の執筆・校正・編集その他の事業を行うこととされた。しかも、この規程には「学校法人日本体育会・日本体育大学八十年史」の例にならって、「理事長は委員会の意見を聴いて、百年史の執筆を部外者に依頼することができる」との文言が追加されている。また、法人本部に編纂委員会の事務局を置き、幹事及び書記若干名を置くこととされた。これによって百年史刊行事業の日処がつけられ、昭和六十八年三月三十一日までが刊行の期限とされたのである。十一年間にわたる事業として百年史の編纂が構想されたわけである。しかし、第一回の編纂委員会が開催されたのは、昭

和五十八年六月二十九日であったことからしてみれば、その期間は実際には十年間を切っていたのである。

この間、編纂委員会委員長は三代にわたった。竹本正男委員から見形道夫委員を経て長田一臣委員へとリレーされた。この交替は委員長が日本体育大学を定年退職したための措置であったが、これに伴って編集方針にも若干の変更がなされている。

昭和五十八年七月十三日の編纂委員会では、(一)通史と資料とにわけて編集すること、(二)大学では独自に編纂委員会を設けること、(三)執筆者は分担方式とすることが申し合わされ、萬波教幹事(法人嘱託職員)から本書の構成案が提出された。構成原案は、昭和六十年六月四日の第三回編纂委員会で大幅に変更され、昭和六十一年四月二十三日付けをもって法人設置の各学校に対して原稿執筆の依頼が開始されている。

しかし、昭和六十三年六月二十七日の文書、すなわち「百年史刊行計画」によれば、構成案は再度変更され、次のようになっていた。

口絵

序 百年史刊行にあたって

第一編 日本体育会の百年 一二〇枚

第二編 日本体育大学の百年 二〇〇枚

第三編 日本体育会各学校の歴史 一五〇枚

年譜

付録 史料・資料

この萬波幹事による構成案によれば、本編と資料編を切り離して刊行するとの当初の計画は、合冊本とすることに変更されている。また、四百字詰原稿用紙による上記の枚数を定めているが、どのような計算方法に基づいて割り出したのかは判然としないけれども、9ポないし10ポ活字を使ったB5判の頁数は口絵を含めて三三六頁になるということであった。

このように、実質的な内容の検討、原稿の作成作業はおろか、資料の収集・整理等も行われず、百年史としての構成の案だけが二転三転して約五年間が費やされてしまったが、その構成案も無駄におわることとなった。本書は、当初から書名を八十年史に

ならって『学校法人日本体育会・日本体育大学百年史』として構想されてきたにも拘らず、平成二年二月二十三日の編纂委員会では『学校法人日本体育会百年史』を最終的なタイトルとすることに決定し、翌二十四日の日付けで米本正理事長に報告されているのである。これは、経営母体である法人と、教育・研究活動の現場である大学の年史を同一の姿勢で編纂することは困難であるとの大学選出の編纂委員会委員からの強い主張によるものであった。このことにより当然のことながら、既に依頼され執筆済の原稿は、この段階になって新たに稿を起し直す必要に迫られたのである。

平成二年五月になって、大学選出委員の定年退職による補充と、全く進展しない原稿作成作業に対処するために、新たに大学より今井毅、谷釜了正の二名の委員が任命された。

平成二年六月、事態を全面的に打開するために、編纂作業のための実行部隊が編成されることとなった。いうまでもなくこの実行部隊の総責任者には長田一臣編纂委員会委員長があたり、実働の中心は日

本体育大学体育史研究室のスタッフとすることになった。研究室主任の高島実（委員）、谷釜了正（委員）、さらに佐久間康、金田英子、水谷秀樹の各教員、野田克彦、下谷内勝利、荻浩三、大杉元一、斎藤雅英の各大学院生がこの仕事に従事することになり、また図書館からは山井康司（幹事）、阿部憲二の両氏の協力が取り付けられたのである。しかしながら、極めて遺憾なことであるが、こうした実行部隊の編成と活動については、教授会等で報告され、正式に認知されることが遂になかった。

年表・資料編の作成作業の責任者に阿部氏が、本編の執筆責任者に谷釜委員があたり、実働隊全体の統括責任者として高島委員がその任にあたることになった。その他の教員および院生は、その都度必要に応じて資料の収集・整理作業等に従事した。刊行までの時間的猶予は一年四か月足らずしかないために、作業はしばしば深夜にまで及んでいる。また、この作業過程において日本体育大学大学院の修了者であり、当研究室で修士論文を纏めた松尾順一（現、東京都立商科短期大学）および福地豊樹（現、群馬大学）の両先生にも専門の立場からご協力を載いて

いる。さらに安岡博文氏（法人本部事務局職員）も直接・間接に多くの協力を惜しまれなかった。ここに深甚なる感謝を申し上げたい。

ともあれ、この実行部隊は何よりもまず史（資料）の収集と整理を最優先の業務とした。従来より大学図書館が「日体資料」として収集し続けてきた史（資料）が整理され、法人本部に保管の資料も追加された。その中には、本学図書館に貴重な資料を提供された大場一義先生（現、信州大学）や中村民雄先生（現、福島大学）からの日体関係史料や、さらには「学校法人日本体育会・日本体育大学八十年史」の執筆者の木下秀明先生（現、日本大学）からの資料も含まれている。また、綿井永寿委員を通して「大正風俗スケッチ・東京あれこれ」の著作者として知られる竹内重雄氏が大井時代の日本体育会体操学校の資料を提供して下さった。ここに記して、衷心よりお礼申し上げねばならない。

資料の収集・整理作業が一段落したところで、本書の構成を確定して執筆作業に入った。刊行予定日として平成三年十月二十八日の「学校法人日本体育

会・日本体育大学創立百周年記念式典」当日が選ばれていたために、執筆にかけることのできる期間は十ヶ月に満たなかった。すでに萬波幹事によって纏められていた「学校法人日本体育会の百年」の原稿は、僅かに五十頁余にしかならなくて、到底百年の歴史に見合うだけの分量とは言えず、これを追加するか、新たに稿を起すかが検討されたが、本書の書名が『学校法人日本体育会百年史』に改められていたことから、内容の主体を学校法人日本体育会の歴史に置き、新たに全体の構成を見直して執筆し直さざるを得ないことになったのである。したがって、従前の原稿については殆ど役にたたなかったといわねばならない。一方、法人傘下にある学校のうち、高等学校四校、専門学校一校、幼稚園一校の原稿は既に脱稿の状態にあったが、これらについても、内容的にはなく、全体のバランスを斟酌した上で、それぞれの執筆者により詳しい記述をお願いせざるを得ないこととなった。これにあたって実行部隊からは、新たに若干の追加資料の補充をお願いされている。

第一部「学校法人日本体育会の沿革」が脱稿された段階では、第二部第一編の「日本体育大学の沿革」と、第二編「日本体育大学女子短期大学の沿革」については、未だ全く手付かずの状態にあった。この二編の執筆は極めて短時に急ピッチで進められた。細かな事柄にまで注意を集中して叙述することは不可能であり、また時間的遅れを取り戻すために、執筆担当者が以前に叙述した文章を採用することも止むなしとした。とりわけ日本体育大学ラグビー部の部史『チャンスの像とともに』と日体ラグビー八十余年の歩み』からは多くの部分が転載されたのである。この点に関して、ラグビー部史の編集委員会委員長であった綿井永寿先生のご理解に感謝申し上げますねばならない。

とまれ、このようにして遅れた作業が実質的には約十か月間の激務によって取り戻され、平成三年七月の時点で十月刊行の目処がたてられることになったのである。このように信じがたい離れ業が可能となったのは、ワープロという武器をつかって編集および植字・校正の工程を短縮することができたから

である。原稿用紙に認められた原稿ではなく、フロッピーディスクに入力された原稿を印刷所に入稿するという方法がとられたのである。勿論、書籍作りの過程において如何に能率化・省力化の工夫が講じられたとしても、最終的に発刊に漕ぎつけるまでには、各頁ごとのレイアウト編集や校正といった細心の集中力を要求される陰に隠れた作業を避けて通る訳にはいかない。この作業を終始担当された阿部憲二氏の忍耐と努力に対して、改めて賞賛の言葉を贈りたい。

しかしながら、このような努力も虚しく、^{諸般}の事情により予定の期日に本書を上梓することができなかつた。非常に残念なことであり、その後作業が再開されても最早実行部隊に一時期の精神的・肉体的な緊迫感の維持を要求することは困難になってしまった。しかしながら、この遅れによって多少なりとも心安まるメリットもあつた。それは、本書の口絵に、皇太子殿下の台臨を仰いで盛大に挙行することができた「学校法人日本体育会・日本体育大学創立百周年記念式典」の様相を一部掲載することが

できたからである。このことと併せて、体育史研究室のスタッフともども本書の刊行を心より慶びたいと思う。
(了)

